

1

解答例のページへ

平面上に三角形 ABC と動点 P がある。ある定数 k について、 $PA^2 + 2PB^2 + 3PC^2 = k$ を満たすように点 P が動くとき、点 P は円を描く。この円の中心を O とするとき、以下の問いに答えよ。

- (1) \overrightarrow{OC} を \overrightarrow{OA} , \overrightarrow{OB} を用いて表せ。
- (2) 三角形 OAB , OBC , OCA の面積をそれぞれ S_1 , S_2 , S_3 とする。このとき、 $S_1 : S_2 : S_3$ を求めよ。

2

解答例のページへ

a は実数とする。関数 $f(x)$ を $f(x) = x^3 - 3(a+2)x^2 + 24ax - 2a^2 - 41a + 28$ と定めるとき、以下の問いに答えよ。

- (1) $f(2) \geq 0$ となるとき、 a のとり得る値の範囲を求めよ。
- (2) $x \geq 2$ となるすべての x に対して $f(x) \geq 0$ が成り立つとき、 a のとり得る値の範囲を求めよ。

3

解答例のページへ

数列 $\{a_n\}$ は初項 a が 0 でない等差数列であり、また、 $a_1, \frac{a_2}{3}, \frac{a_3}{5}$ は公比が 1 でない等比数列であるとする。このとき、 $\{a_n\}$ の一般項を a および n を用いて表せ。

4

解答例のページへ

$0 \leq x \leq 2\pi$ において、2 曲線 $y = |\sin x|$, $y = -\cos 2x$ によって囲まれた図形の面積を求めよ。また、この図形を x 軸のまわりに 1 回転させてできる回転体の体積を求めよ。

5

解答例のページへ

実数全体を定義域にもつ t の関数 p は微分可能で、すべての t に対し $\frac{dp}{dt} > 0$ を満たすとする。また、 p の値域は実数全体であるとする。座標平面上において、曲線 $C: y = \frac{e^x + e^{-x}}{2}$ 上を運動する点 P の時刻 t における座標は $(p, \frac{e^p + e^{-p}}{2})$ であり、点 P の速度 \vec{u} はすべての t に対し $|\vec{u}| = 2$ を満たすとする。座標平面上を運動する点 Q は、時刻 t において、曲線 C の点 P における法線の $y > \frac{e^x + e^{-x}}{2}$ を満たす部分にあり、 $PQ = 1$ であるとする。 t が実数全体を動くとき、以下の問いに答えよ。ただし、 e は自然対数の底である。

- (1) 点 Q の座標を p を用いて表せ。
- (2) 点 Q の速度を \vec{v} とするとき、 $|\vec{v}|$ のとり得る値の範囲を求めよ。

1

問題のページへ

(1) ある定数 k について $PA^2 + 2PB^2 + 3PC^2 = k$ から, $|\overline{PA}|^2 + 2|\overline{PB}|^2 + 3|\overline{PC}|^2 = k$

$$|\overline{CA} - \overline{CP}|^2 + 2|\overline{CB} - \overline{CP}|^2 + 3|\overline{CP}|^2 = k$$

まとめると, $6|\overline{CP}|^2 + |\overline{CA}|^2 + 2|\overline{CB}|^2 - 2\overline{CA} \cdot \overline{CP} - 4\overline{CB} \cdot \overline{CP} = k$ となり,

$$|\overline{CP}|^2 - \frac{1}{3}(\overline{CA} + 2\overline{CB}) \cdot \overline{CP} = \frac{1}{6}(k - |\overline{CA}|^2 - 2|\overline{CB}|^2)$$

$$\begin{aligned} \left| \overline{CP} - \frac{1}{6}(\overline{CA} + 2\overline{CB}) \right|^2 &= \frac{1}{36}(6k + |\overline{CA} + 2\overline{CB}|^2 - 6|\overline{CA}|^2 - 12|\overline{CB}|^2) \\ &= \frac{1}{36}(6k - 5|\overline{CA}|^2 - 8|\overline{CB}|^2 - 4\overline{CA} \cdot \overline{CB}) \end{aligned}$$

ここで, 定数 $K = \frac{1}{36}(6k - 5|\overline{CA}|^2 - 8|\overline{CB}|^2 - 4\overline{CA} \cdot \overline{CB})$ とおくと,

$$\left| \overline{CP} - \frac{1}{6}(\overline{CA} + 2\overline{CB}) \right|^2 = K$$

点 P は中心 O の円を描くことから, $\overline{CO} = \frac{1}{6}(\overline{CA} + 2\overline{CB})$ とおくことができ,

$$-6\overline{OC} = \overline{OA} - \overline{OC} + 2(\overline{OB} - \overline{OC}), \quad -3\overline{OC} = \overline{OA} + 2\overline{OB}$$

したがって, $\overline{OC} = -\frac{1}{3}\overline{OA} - \frac{2}{3}\overline{OB}$ となる。

(2) 辺 AB を 2:1 に内分する点を D とおくと,

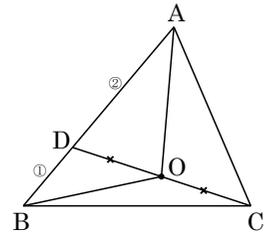
$$\overline{OD} = \frac{1}{3}\overline{OA} + \frac{2}{3}\overline{OB}$$

(1)から $\overline{OC} = -\overline{OD}$ となり, O は線分 CD の中点である。

ここで, $\triangle ABC$ の面積を S , $\triangle OAB$, $\triangle OBC$, $\triangle OCA$ の面積をそれぞれ S_1 , S_2 , S_3 とすると,

$$S_1 = \frac{1}{2}S, \quad S_2 = \frac{1}{2} \cdot \frac{1}{3}S = \frac{1}{6}S, \quad S_3 = \frac{1}{2} \cdot \frac{2}{3}S = \frac{1}{3}S$$

これより, $S_1 : S_2 : S_3 = \frac{1}{2} : \frac{1}{6} : \frac{1}{3} = 3 : 1 : 2$ である。



[コメント]

円のベクトル方程式を題材にした平面ベクトルの問題です。

2

問題のページへ

(1) $f(x) = x^3 - 3(a+2)x^2 + 24ax - 2a^2 - 41a + 28$ に対し、 $f(2) \geq 0$ から、

$$8 - 12(a+2) + 48a - 2a^2 - 41a + 28 \geq 0, \quad 2a^2 + 5a - 12 \leq 0$$

すると、 $(a+4)(2a-3) \leq 0$ より、 $-4 \leq a \leq \frac{3}{2}$ となる。

(2) $x \geq 2$ となるすべての x に対して $f(x) \geq 0$ が成り立つとき、まず $f(2) \geq 0$ であることが必要であり、(1)から $-4 \leq a \leq \frac{3}{2}$ のもとで、

$$\begin{aligned} f'(x) &= 3x^2 - 6(a+2)x + 24a \\ &= 3(x-2a)(x-4) \end{aligned}$$

x	...	$2a$...	4	...
$f'(x)$	+	0	-	0	+
$f(x)$	↗		↘		↗

すると、 $-8 \leq 2a \leq 3$ から、 $f(x)$ の増減は

右表のようになる。

したがって、 $x \geq 2$ で $f(x) \geq 0$ の条件は、 $f(2) \geq 0$ から、 $2a$ と 2 の大小関係にかかわらず $f(4) \geq 0$ であり、

$$64 - 48(a+2) + 96a - 2a^2 - 41a + 28 \geq 0, \quad 2a^2 - 7a + 4 \leq 0$$

これより、 $\frac{7-\sqrt{17}}{4} \leq a \leq \frac{7+\sqrt{17}}{4}$ となり、 $-4 \leq a \leq \frac{3}{2}$ と合わせると、

$$\frac{7-\sqrt{17}}{4} \leq a \leq \frac{3}{2}$$

[コメント]

微分と増減の問題です。(1)の設問により、(2)では場合分けが不要になりました。

3

問題のページへ

数列 $\{a_n\}$ は初項 $a \neq 0$ の等差数列より、公差を d とおくと、 $a_n = a + (n-1)d$

さて、 $a_1 = a$ 、 $\frac{a_2}{3} = \frac{a+d}{3}$ 、 $\frac{a_3}{5} = \frac{a+2d}{5}$ は、この順に等比数列より、

$$\left(\frac{a+d}{3}\right)^2 = a \cdot \frac{a+2d}{5}, \quad 5(a^2 + 2ad + d^2) = 9(a^2 + 2ad)$$

すると、 $4a^2 + 8ad - 5d^2 = 0$ から $(2a-d)(2a+5d) = 0$ となり、 $d = 2a$ 、 $-\frac{2}{5}a$

(i) $d = 2a$ のとき $a_1 = a$ 、 $\frac{a_2}{3} = \frac{a+2a}{3} = a$ 、 $\frac{a_3}{5} = \frac{a+4a}{5} = a$

すると、等比数列 a_1 、 $\frac{a_2}{3}$ 、 $\frac{a_3}{5}$ は、公比が 1 となり不適である。

(ii) $d = -\frac{2}{5}a$ のとき $a_1 = a$ 、 $\frac{a_2}{3} = \frac{1}{3}\left(a - \frac{2}{5}a\right) = \frac{a}{5}$ 、 $\frac{a_3}{5} = \frac{1}{5}\left(a - \frac{4}{5}a\right) = \frac{a}{25}$

すると、等比数列 a_1 、 $\frac{a_2}{3}$ 、 $\frac{a_3}{5}$ は、公比が $\frac{1}{5}$ となり適する。

(i)(ii)より、 $d = -\frac{2}{5}a$ となり、 $a_n = a - \frac{2}{5}a(n-1) = -\frac{2}{5}an + \frac{7}{5}a$

[コメント]

等差数列と等比数列についての基本題です。なお、上記の解は、 a_1 、 $\frac{a_2}{3}$ 、 $\frac{a_3}{5}$ が、「この順に等比数列」、すなわち等比中項が $\frac{a_2}{3}$ であると解釈したのですが、単に 3 数が等比数列をなすというのであれば、 $d = -\frac{7}{2}a$ 、 $d = -\frac{11}{12}a$ の場合も考えられます。

4

問題のページへ

$f(x) = |\sin x|$, $g(x) = -\cos 2x$ とおくと,

$$f(x + \pi) = |\sin(x + \pi)| = |-\sin x| = f(x)$$

$$f(2\pi - x) = |\sin(2\pi - x)| = |\sin(-x)| = |-\sin x| = f(x)$$

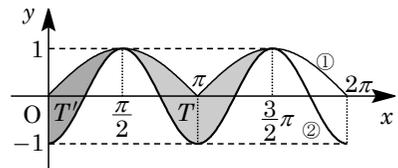
$$g(x + \pi) = -\cos 2(x + \pi) = -\cos 2x = g(x)$$

$$g(2\pi - x) = -\cos 2(2\pi - x) = -\cos(-2x) = -\cos 2x = g(x)$$

これより, 2 曲線 $y = f(x) = |\sin x| \cdots \cdots \textcircled{1}$, $y = g(x) = -\cos 2x \cdots \cdots \textcircled{2}$ は, ともに周期が π で, そのグラフは直線 $x = \pi$ について対称である。

さて, $0 \leq x \leq 2\pi$ において, 2 曲線 $\textcircled{1}$ と $\textcircled{2}$ によって囲まれた図形 T は, 右図の薄い網点部である。

図形 T は直線 $x = \pi$ について対称で, しかも $\pi \leq x \leq \frac{3}{2}\pi$ の部分は $0 \leq x \leq \frac{\pi}{2}$ と同じ形である。



これより, 図形 T の面積 S は, $0 \leq x \leq \frac{\pi}{2}$ において 2 曲線 $\textcircled{1}$ と $\textcircled{2}$ にはさまれた図形 T' の面積の 2 倍になり,

$$\begin{aligned} \frac{S}{2} &= \int_0^{\frac{\pi}{2}} \{f(x) - g(x)\} dx = \int_0^{\frac{\pi}{2}} (\sin x + \cos 2x) dx = \left[-\cos x + \frac{1}{2} \sin 2x \right]_0^{\frac{\pi}{2}} \\ &= -(-1) = 1 \end{aligned}$$

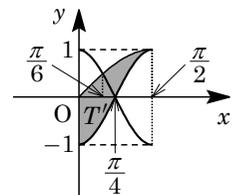
したがって, $S = 2$ である。

また, 図形 T を x 軸のまわりに 1 回転させてできる回転体の体積 V は, 図形 T' を x 軸のまわりに 1 回転させてできる回転体の体積の 2 倍になる。

そこで, $0 \leq x \leq \frac{\pi}{2}$ において, 曲線 $\textcircled{2}$ を x 軸について折り返した $y = \cos 2x$ と $y = \sin x \cdots \cdots \textcircled{1}$ を連立すると, $\cos 2x = \sin x$ から $1 - 2\sin^2 x = \sin x$ となり,

$$2\sin^2 x + \sin x - 1 = 0, \quad (2\sin x - 1)(\sin x + 1) = 0$$

すると, $\sin x = \frac{1}{2}$ から $x = \frac{\pi}{6}$ となるので,



$$\begin{aligned} \frac{V}{2} &= \pi \int_0^{\frac{\pi}{6}} \{-g(x)\}^2 dx + \pi \int_{\frac{\pi}{6}}^{\frac{\pi}{2}} \{f(x)\}^2 dx - \pi \int_{\frac{\pi}{4}}^{\frac{\pi}{2}} \{g(x)\}^2 dx \\ &= \pi \int_0^{\frac{\pi}{6}} \cos^2 2x dx + \pi \int_{\frac{\pi}{6}}^{\frac{\pi}{2}} \sin^2 x dx - \pi \int_{\frac{\pi}{4}}^{\frac{\pi}{2}} \cos^2 2x dx \\ &= \pi \int_0^{\frac{\pi}{6}} \frac{1 + \cos 4x}{2} dx + \pi \int_{\frac{\pi}{6}}^{\frac{\pi}{2}} \frac{1 - \cos 2x}{2} dx - \pi \int_{\frac{\pi}{4}}^{\frac{\pi}{2}} \frac{1 + \cos 4x}{2} dx \\ &= \frac{\pi}{2} \left[x + \frac{1}{4} \sin 4x \right]_0^{\frac{\pi}{6}} + \frac{\pi}{2} \left[x - \frac{1}{2} \sin 2x \right]_{\frac{\pi}{6}}^{\frac{\pi}{2}} - \frac{\pi}{2} \left[x + \frac{1}{4} \sin 4x \right]_{\frac{\pi}{4}}^{\frac{\pi}{2}} \end{aligned}$$

値を代入してまとめると、

$$\frac{V}{2} = \frac{\pi}{2} \left(\frac{\pi}{6} + \frac{1}{4} \cdot \frac{\sqrt{3}}{2} \right) + \frac{\pi}{2} \left(\frac{\pi}{3} + \frac{1}{2} \cdot \frac{\sqrt{3}}{2} \right) - \frac{\pi}{2} \cdot \frac{\pi}{4} = \frac{\pi}{2} \left(\frac{\pi}{4} + \frac{3}{8} \sqrt{3} \right)$$

したがって、 $V = \pi \left(\frac{\pi}{4} + \frac{3}{8} \sqrt{3} \right)$ である。

[コメント]

面積と回転体の体積計算の問題です。三角関数のもつ周期性や対称性に着目することがポイントです。

5

問題のページへ

- (1) 曲線 $C: y = \frac{e^x + e^{-x}}{2}$ 上を運動する点 $P(p, \frac{e^p + e^{-p}}{2})$ における接線の方法ベクトルの成分は、 $y' = \frac{e^x - e^{-x}}{2}$ より、

$$(1, \frac{e^p - e^{-p}}{2}) = \frac{1}{2}(2, e^p - e^{-p}) \text{ とおくことができる。}$$

これより、法線の方法ベクトルで y 成分が正のものは、 $(-e^p + e^{-p}, 2)$ とおけるので、 $PQ=1$ から、

$$\begin{aligned} \overrightarrow{OQ} &= \overrightarrow{OP} + \frac{1}{\sqrt{(-e^p + e^{-p})^2 + 2^2}}(-e^p + e^{-p}, 2) \\ &= (p, \frac{e^p + e^{-p}}{2}) + \frac{1}{e^p + e^{-p}}(-e^p + e^{-p}, 2) \\ &= (p - \frac{e^p - e^{-p}}{e^p + e^{-p}}, \frac{e^p + e^{-p}}{2} + \frac{2}{e^p + e^{-p}}) \\ &= (\frac{(p-1)e^p + (p+1)e^{-p}}{e^p + e^{-p}}, \frac{e^{2p} + e^{-2p} + 6}{2(e^p + e^{-p})}) \end{aligned}$$

したがって、 $Q(\frac{(p-1)e^p + (p+1)e^{-p}}{e^p + e^{-p}}, \frac{e^{2p} + e^{-2p} + 6}{2(e^p + e^{-p})})$ となる。

- (2) $P(x, y)$ とおくと $x = p$, $y = \frac{e^p + e^{-p}}{2}$ であり、点 P の速度 \vec{u} は、

$$\vec{u} = (\frac{dx}{dt}, \frac{dy}{dt}) = (\frac{dx}{dp} \cdot \frac{dp}{dt}, \frac{dy}{dp} \cdot \frac{dp}{dt}) = \frac{dp}{dt} (1, \frac{e^p - e^{-p}}{2})$$

$\frac{dp}{dt} > 0$ から、 $|\vec{u}| = |\frac{dp}{dt}| \sqrt{1^2 + (\frac{e^p - e^{-p}}{2})^2} = \frac{dp}{dt} \cdot \frac{e^p + e^{-p}}{2}$ となり、 $|\vec{u}| = 2$ より、

$$\frac{dp}{dt} \cdot \frac{e^p + e^{-p}}{2} = 2, \quad \frac{dp}{dt} = \frac{4}{e^p + e^{-p}} \dots \dots (*)$$

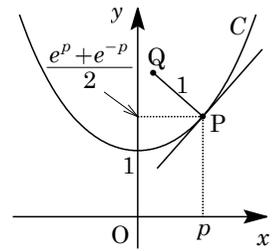
さて、 $Q(X, Y)$ とおくと、(1) から $X = p - \frac{e^p - e^{-p}}{e^p + e^{-p}}$, $Y = \frac{e^p + e^{-p}}{2} + \frac{2}{e^p + e^{-p}}$

$$\frac{dX}{dp} = 1 - \frac{(e^p + e^{-p})^2 - (e^p - e^{-p})^2}{(e^p + e^{-p})^2} = 1 - \frac{4}{(e^p + e^{-p})^2} = \frac{(e^p - e^{-p})^2}{(e^p + e^{-p})^2}$$

$$\frac{dY}{dp} = \frac{e^p - e^{-p}}{2} - \frac{2(e^p - e^{-p})}{(e^p + e^{-p})^2} = \frac{(e^p - e^{-p})\{(e^p + e^{-p})^2 - 4\}}{2(e^p + e^{-p})^2} = \frac{(e^p - e^{-p})^3}{2(e^p + e^{-p})^2}$$

すると、点 Q の速度 \vec{v} は、(*)より、

$$\begin{aligned} \vec{v} &= (\frac{dX}{dt}, \frac{dY}{dt}) = (\frac{dX}{dp} \cdot \frac{dp}{dt}, \frac{dY}{dp} \cdot \frac{dp}{dt}) = \frac{4}{e^p + e^{-p}} (\frac{dX}{dp}, \frac{dY}{dp}) \\ &= \frac{4}{e^p + e^{-p}} \left(\frac{(e^p - e^{-p})^2}{(e^p + e^{-p})^2}, \frac{(e^p - e^{-p})^3}{2(e^p + e^{-p})^2} \right) = \frac{4(e^p - e^{-p})^2}{(e^p + e^{-p})^3} \left(1, \frac{e^p - e^{-p}}{2} \right) \end{aligned}$$



$$|\vec{v}| = \left| \frac{4(e^p - e^{-p})^2}{(e^p + e^{-p})^3} \right| \sqrt{1^2 + \left(\frac{e^p - e^{-p}}{2} \right)^2} = \frac{4(e^p - e^{-p})^2}{(e^p + e^{-p})^3} \cdot \frac{e^p + e^{-p}}{2}$$

$$= \frac{2(e^p - e^{-p})^2}{(e^p + e^{-p})^2} = 2 \left(\frac{e^p - e^{-p}}{e^p + e^{-p}} \right)^2$$

そこで、 $f(p) = \frac{e^p - e^{-p}}{e^p + e^{-p}}$ とおくと、 $|\vec{v}| = 2\{f(p)\}^2$ となり、

$$f'(p) = \frac{(e^p + e^{-p})^2 - (e^p - e^{-p})^2}{(e^p + e^{-p})^4} = \frac{4}{(e^p + e^{-p})^2} > 0$$

これより、 p が実数全体を動くとき、 $f(p)$ は単調に増加し、

$$\lim_{p \rightarrow -\infty} f(p) = \lim_{p \rightarrow -\infty} \frac{e^{2p} - 1}{e^{2p} + 1} = -1, \quad \lim_{p \rightarrow \infty} f(p) = \lim_{p \rightarrow \infty} \frac{1 - e^{-2p}}{1 + e^{-2p}} = 1$$

したがって、 $-1 < f(p) < 1$ から $0 \leq \{f(p)\}^2 < 1$ となり、 $0 \leq |\vec{v}| < 2$ である。

[コメント]

平面上の点の運動についての微分の応用問題です。計算量はかなりありますが、題材が有名な曲線で、途中に同じプロセスが現れてくるようなこともあり、煩雑という感じはしないでしょう。